

介護老人保健施設 しおさい

症 例 概 要 利用者：夫(90代・男性・要介護2) 妻(80代・女性・要介護3)

病名：夫(脳出血) 妻(COVID19罹患者・脳梗塞・高次脳機能障害) 妻(H25年からしおさいご利用。最終入所は令和3年3月長期入所をご利用)

経 過： 妻が2回目の脳梗塞発症し、令和2年5月より長期入所。令和3年2月、当施設新型コロナウイルスクラスター時に陽性者となり、一時重篤な状態となる。西伊豆健育会病院で入院加療後再入所。妻がCOVID19で療養中に、今度は夫がご自宅で脳出血発症、急性期治療後、当施設にご入所され、現在はご夫婦でしおさいをご利用されている。

内 容

妻は令和2年5月のご入所当初、失語症・構音障害があり発語不明瞭、ADLは全介助でした。前医でほぼ寝たきりとなっており、栄養面は経鼻経管栄養の状態でご入所。もともとご家族は経口摂取をご希望されておりましたが、前医でも重度の嚥下困難で胃瘻造設試みるが高度食道裂孔ヘルニア・食道潰瘍にて造設出来ず、また何よりご本人に経口摂取の意欲がなく経口摂取は断念した経緯がありました。ご家族と何度も話し合い、職員も諦めずに経口トライをし、経口移行に成功しました。

その後もしおさいでお元気に生活されていましたが、令和3年2月、クラスター発生時にCOVID19陽性者となってしまいました。一時は肺炎悪化、褥瘡発生など全身状態不良となり、西伊豆健育会病院へ入院となりました。急性期が過ぎ、3月中旬にしおさいへ再入所。その当時は、なかなか経口摂取も困難で、最期はしおさいで…といったご希望で再入所となりましたが、徐々に回復され、お食事も召し上がれるようになり、褥瘡も治癒となり、現在に至ります。

そんな妻の療養中に、今度は夫がご自宅で脳出血を発症し、同じく西伊豆健育会病院で急性期治療後、ご家族の希望で夫もしおさいにご入所となりました。

全身状態としては安定していましたが、歩行はサークル歩行でも不安定で見守りを要する状態のご入所でした。認知機能の低下があり、ご自分をご病気をされた認識がないため、右麻痺により傾いてしまうのは、夜に飲酒したからと思い込んでいらっしゃいました。またもともと頑固な性格もあり、病気を認めることも出来ず、「息子たちが勝手にやっているんだ。一人で暮らせる」とご入所生活やリハビリを拒否することも多々ありました。夫は妻が以前SSをご利用している際にもご面会に来るほど、妻の事を大切にされていました。そのため、しおさいで奥様と生活されていることを繰り返しお伝えし、少しの時間でもお二人が顔を合わせる機会を作るように働きかけました。徐々に「ああ、ここはしおさいか。母ちゃんがいるところだ」とご理解され、ご自身も「まずは歩けるようにならないとな」と目標を持ってリハビリが行えるように

なりました。現在もサークル歩行がメインですが、独歩でも以前より安定して歩けるようになりました。施設内のイベントでは、写真撮影の時には妻を気遣ったり、妻のお誕生日会の際にはプレゼントを開けてあげるなど、仲睦まじいご夫婦の姿があります。お二人がご入所される前、高齢のご夫婦が老老介護で二人暮らしをしていたのも、周囲の反対がある中、夫が妻を家で介護したい気持ちが強かったからです。しかし妻が脳梗塞で入院したことを機に、夫は独居となりました。長い間連れ添ったご夫婦が、それぞれ病気を発症し、離ればなれの生活を送っていましたが、今こうしてしおさいでお二人揃って暮らされています。自宅で老老介護していた時とは違い、夫は自分が無理をしなくてもそばで見守ることが出来る環境で安心して療養出来、今では「こうしてここで暮らせてええなあ。母ちゃんもいるし」と話されています。またご家族とも、パネル面会やオンライン面会を通じて会うことが出来、喜んでおられます。長い間妻の介護をしてきた夫にとっては、しおさいが新しい家となって、夫婦での生活が再開出来たことにより、喜びだけではなく、また母ちゃんのために頑張ろうという生きる意欲に繋がっています。しおさいがお二人の第二の人生の家となり、ご夫婦やご家族に笑顔をもたらせた症例となりました。